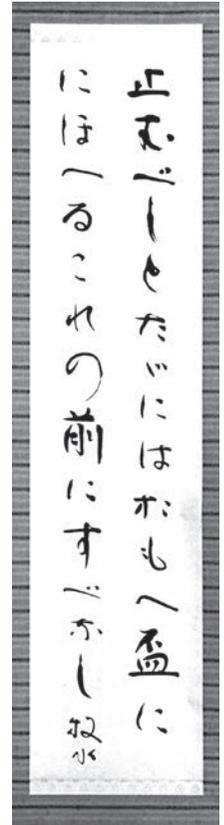


沼津市若山牧水記念館

第58号 平成29年3月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



止むべしとたゞにはおもへ盃に
にほへるこれの前にすべなし 牧水

第十五歌集『黒松』に収められた大正十五年作の「酒」と題される七首のうちの冒頭の一首。同年の『創作』五月号の「創作四月便」の記事の中に次のような一節がある。

今度の家は御存じの通り千本松原の蔭に在る。そしてこの松原は松原とは云つても、一つの森林である。雑木林である。(中略)晴れば日に一度か二度、自分の部屋を出てこれらの草木を眺めながら森なかの小径をさまよふのが此頃のわたしの日課である。(中略)斯うした散歩がいまのわたしにはせいぜいで、浜や海はあまりに明るく強く、町まで行くとなるともう息が切れて苦痛である。局部的に何処がわるいといふでは無い様だが、ただ全身的にいけないのである。(中略)要するに長年の酒毒と、一昨年来の半折旅行の疲労とが一緒にいま身体に出てゐるのである。諦むるほかはない。一月二月と甚だわるく、三月の末かけて大分よかつたが、大会でまた少々あと戻りした。でも、このままにもう少し慎しんで居れば、まだだからにあらが切れた様でもなし、程なく元氣になります。(後略)

主治医の稲玉医師から酒を少し慎むようにと言われ、自分でも判っているのだが、盃に匂う香を嗅いでしまふと為す術が無くなると述懐する。『黒松』所収の「酒」と題する作品には、揭示の作品のほか、

笹の葉の葉ずゑのつゆとかしこみて
かなしみすすこのうま酒を

かなしみて飲めばこの酒いちはずわれを酔はしむ
泣くべかりけり

われはもよ泣きて申さむかしこみて飲むこの酒にな
にの毒あらむ

ふくみたる酒のほひのおのづから独り匂へるわが
心かも

などがある。昭和三年九月十七日に亡くなる半年ほど前に詠った「合掌」と題する作品には、署名な

妻が眼を盗みて飲める酒なれば惶て飲み噎せ鼻ゆこ
ぼしつ

うらかなしはしたためにさへ気をおきて盗み飲む酒と
わがなりにけり

足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壺は立ちて待
ちをる

があつて、医師に止められ、体調の悪さを自覚しながら酒に執する牧水がここにいた。この自虐さが切ない。

この半折は、きちつとした文字で書かれていて酔った勢いで書いたものでなく、半折販売のお客に感謝の意を込めて正座して書いた趣が感じられる。(須永秀生)

歌ことばの水脈

今野寿美

歌人は、つくづく不思議なことは遣いをするものである。

いささか自虐的な言い方をしてしまうが、伝統詩の宿命として、短歌を作る人たちは、社会的にはすでに死語といつてよいことばや、習慣的に使われていて辞書にも載っていないことばを、平然と使いこなして作品を作り重ねているのである。その点においては近代短歌も現代短歌も変わりがない。

もちろん、すべての短歌用語がそれに該当するわけではないけれど、状況としてはやはり特殊。身近な問題としていえば、友人や家族に自作の短歌を読んでもらったら、意味がわからないとか、婉曲にムズカシイと言われてしまった、なんて体験談は幾度も耳にしたことだ。日頃から短歌に親しんでいるわけではない読者にとって、「見ゆ」だの「聞こゆ」だの「汝れ」だの「羨し」などとあつたら戸惑わないはずがなく、それは当然の反応といつていい。一方、作者の側からすれば、短歌の世界では当たり前に使われていることばであつて、それは、いろいろ学んだなかから

身につけた成果なのであるから、思いがけない拒絶に遭うような気がしてしまう。

同じ伝統詩の俳句も、事情はかなり近い。つい最近のことだが、読み始めた新刊の小説『遠い唇』（北村薫著）の冒頭に、こんな話が出てきた。

大学で経済を教える教授が、同僚に俳句での言い回しとして「欲る」という語があることを話す。

大学だいがくに来て踏む落葉コーヒー欲る

中村草田男くさたお作であるというこの句が想定されていくらしく、教授は「欲る」という語が「欲しくなる」の意であることを同僚に語りかけるのである。同僚は、そんなことばは聞いたことがないと答えながら、教授の話に耳を傾ける。句意としては、秋も深まって落ち葉を踏むようになると、コーヒーが恋しい、無性に飲みたくなるものだというわけで、その気分は小説の読者にもよくわかるということになるだろう。

小説中の教授は、「欲る」というのは「欲

しくなる」の意であるとか語っていないが、そもそもこれは、欲しがるという意の文語である。そして短歌でも比較的よく用いられている。『角川古語大辞典』によれば「ほし（欲し）」の動詞形で、奈良時代にすでに、やや限定された用法しかなかったらしい。連用形に「す」の付いた「ほりす（欲りす）」のかわちが後々まで残り、これは「ほつす（欲す）」となった。

「欲る」そのものは『広辞苑』、『大辞林』にも載っているが、おそらく文語としてであつて、『万葉集』からの用例が示されている。現代の辞書に載っていても、先の小説の冒頭にもみるように、一般的には使われる機会がないのだから、こうして小説のなかで語られたりすれば、短歌や俳句はずいぶん風変わりなことば遣いをしていると思われてもしかたのないことだろう。

短歌・俳句の用語は、「欲る」のように古語に由来することが多い。社会での用語が口語に移行しても、伝統詩は基本的に文語、もしくは文語めかした言い回しに依拠してきたため、現代人の意識からは抜け落ちたことも多いということになって久しいのである。

ここでは、短歌に対象を絞って考えるが、その様相は、ひと言でいえば古めかしい。古

典に由来することはなんぞを用いなくても、やさしく伝わる口語で表現すればよいではないかという考えはむろん成り立つし、現に明治の世からその試みはなされてきた。今の時代、若い世代を中心に口語のみによる作歌は勢いを得ていて、歌の世界は二極化の方向にあるという見方もよく耳にする。

ただ、歌をなすことのよろこびのひとつに、一般社会からは消えてしまったことばも堂々と使い、自分の表現のなかに残せるのだという、そんなことばへの愛着は誰にもあつて、決して小さくないことなのではないかとわたしは思っている。たとえば先ほどの「欲る」をめぐり、古語辞典を引いて、その出自を知り、「欲しがる」よりも簡潔なひびきをもつこの語を、実際に現代歌人たちが使いこなしているのに出会うのは、やはりさまざま刺激されることである。しかも、そうした関心を、実は現代の若い世代の歌人も少なからず共有し、実作において生かしていると感じたとき、歌ことばの限らない魅力と価値とを痛感せざるを得なかった。

おもしろいことに、文語に由来する歌ことばといっても、近代以降になつてさかんに詠み入れられるようになった歌ことばもあれば、近代から現代にかけて使われ方に変化を生じ

た歌ことばもある。近現代の名歌のなかの歌ことばという探り方もできるであろう。歌人によつて、その個性が濃く反映されている歌ことばの様相も見えてとることができそうだし、すこし具体的な話に入ろう。

○「地震」

東日本大震災の衝撃の直後、誰もがことばを失い、まして震災を対象に詩歌をなすなど不謹慎なようにすら思えた時期を経て、やがて多くの震災詠が生まれた。阪神淡路大震災のおりも同じ経緯があつたと記憶するが、実際に被災した人びとの作を含めて、詩歌に訴えることで悲しみに耐えたり力を得たりという人びとの心の赴きは、実際に多くの作品の成果となつて残り、今日なお重ねられている。それらの作品において、地震に替わることばとしてしばしば用いられているのが「地震」である。

「なぬ」が文献上に登場するはじめは「日本書紀歌謡」で、「那為」とあることが知られている。ただ、「地が揺り来ば」と読まれているとおり、そもそもは大地の意であつたという「なるゆる」「なるふる」などとして大地が揺れる意を示したわけである。ただ『日本書紀』に「地震の神」とみえることなど、早く

から地震そのものの意に転じた痕跡も伝えられていて、散文には数々の事例があるらしい。近代に至つて、歌人が暮らしの現実を歌に詠む傾向を深めてゆくなかで、漢語の「地震」に替わる語として「地震」は歓迎されたのであろう。「地震す」と動詞化されたり、「朝地震」や「大地震」のような複合語も生まれている。

地震すると人の手とりて戸を出でしこころにさめし朝の夢かな

尾上柴舟『静夜』

朝地震す空はかすかに嵐して一山白き山ざくらかな

地震の夜の草枕をば吹くものは大地が洩らす絶望の息 与謝野晶子『瑠璃光』

いずれも明治期の歌集から引いた。柴舟は動詞化した「地震す」を用いているが、場面



尾上柴舟『静夜』

としては「地震だ!」という突発的な言い方であろう。それが想う人の手を取って戸口を出ようとするという、いささか艶に抒情的な構図となっているところがおもしろい。

牧水が採用したのは「朝地震」という複合語をさらに動詞化した例で、初句切れになっている。春特有の荒れた空の気配に、牧水が格別愛した山ざくらが山を覆いつくして風になぶられているさまが浮かぶ。桜の白さが動きをともなって広がる光景に、うたいだしの重みある言い切りが見合っていよう。



与謝野晶子『瑠璃光』



若山牧水『海の声』

晶子の一首は関東大震災に際してのものである。与謝野夫妻の一家は、当時麴町区（現、千代田区）に住んでいた。家の倒壊は免れたが、外濠で数日避難生活をしている。「草枕」は枕詞ではなく旅寝の意で、その間のことをさすのであろう。

北原白秋も小田原で関東大震災を体験しており、やはり「地震」の語を使って多くの歌をなした。近代歌人が実体験の地震の脅威を作品化するとき、おのずと和語の「地震」を採用するというのも、よくわかるなりゆきである。そうして定着した「地震」は、現代歌人にも、世代を問わず継承されることとなって今日に及んでいる。

ことごと小さな地震が表からはいつて裏へ抜けてゆきたり 山崎方代『迦葉』
地震予報広がる夜の街地震よりも地震待つところのふるえゆらして

大野道夫『夏母』

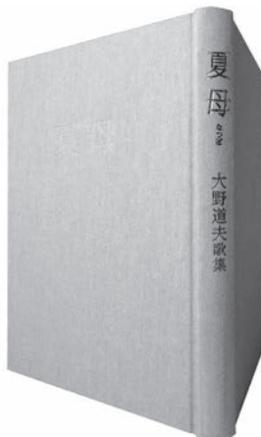
小さな地震に戸を開け戸を閉めつ終始ひとりのふるまひにして

小笠原和幸『定本 春秋雑記』

地震ふるを予想もしつつ積むあまた蔵書の崩れむさまを思へり 真中朋久『火光』



小笠原和幸
『定本 春秋雑記』



大野道夫『夏母』



山崎方代『迦葉』



真中朋久『火光』

山崎方代や大野道夫の作では現代かな遣いによってルビが「ない」となっている。大胆に口語を導入して軽妙な歌世界を繰り広げた方代は、その意味では伝統から距離を置く歌人にみえそうだが、伝統的な歌ことばをむしろ意識して採用している印象がある。右の一首でも、地震の受けとめ方やうたいぶりには飄逸味を漂わせ、しかし、ことばとしては「小さな地震」と据えており、その取り合わせも、決して不自然でないところが興味深い。

現代社会で使われることはなくとも、「地震」は、こうして歌人の意識からは消え失せず、詩歌用語であるという自覚のもとに使われている観がある。

大野の歌では「地震」を繰り返すことで不安と怖れが増幅する流れになっているが、音数の上からも、日常語をはずれた語のひびきからも、ふさわしいという判断があったにちがいない。阪神大震災と東日本大震災の間の時期の一首と思われる。

小笠原和幸は、地震に際して孤としてあることの認識に立ち返る。そこに現代人らしい個性が感じられよう。それでも「地震」を採用していることに、わたしの思いはゆく。

あげた用例の作者の中では一番若い年代の真中朋久（昭和三九年生まれ）が、上代の「地震ふる」を採用しているのは少々意外といえるが、そこに、遙かな時間を抱え込む歌ことばの底力をみてよいのかもしれない。

作者の年代にかかわらず、自覚的に選びとられた歌ことばの安定感、あげた歌々のなかに紛れもないといえるであろう。

○「あくがる」

現代の語としては「あくがれる」だが、そのはじめは「あくがる」であった。ただ、鎌倉時代から「あくがる」「あくがる」は併用されていたらしい。口語の「あくがれる」から文語の「あくがる」はすぐに類推できるであろう。ところが、現実には歌人たちは「あくがる」より「あくがる」を好んでいるように見受けられる。「あ・く・が・る」という現代語にはないひびきを愛でる感覚があるので、なかろうか。それでなくても、短歌の作者は、ことばの日常をやや超えたところに詩的な刺激を覚えるようなのだ。

辞典類には「あくがる」の「がる」に「離る」を読む理解も多くみられ、それは、魂や心が浮かれ出てしまうことを示しているようだ。歌の世界では、和泉式部、西行、牧水を遠望しての共感が、普遍的な広がりをもせているといえるかもしれない。

けふもまたこのころの鉦をうち鳴しうち鳴しつづあくがれて行く

若山牧水『海の声』

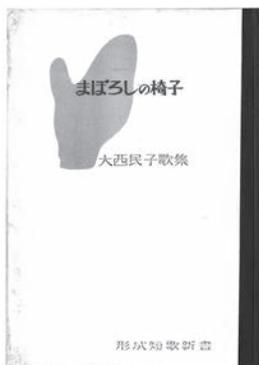
かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待つ夜もなし今は

大西民子『まぼろしの椅子』

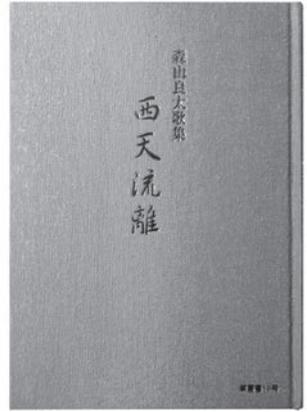
ヒマラヤは「雪の棲み家」の謂ひといふ熱暑インドの民のあくがれ

森山良太『西天流離』

右の一首目で、牧水はみずから「あくがれ」を規定しているかのようにみえる。



大西民子
『まぼろしの椅子』
(さいたま文学館 提供)



森山良太『西天流離』

日向に帰る途上、岡山から広島へと辿る旅のさなかに生まれた十首の最初に置かれた歌で、その三首目が「幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」であった。いずれも牧水の代表作でありつつ、すこし強調しておくすれば、いたく自覚的な「あくがれ」のイメージがここにあるということである。「こころの鉦をうち鳴しうち鳴しつ」と内省を深め、あくまでも自身に向ける問いを重ねてゆく過程。いうまでもないことだが、牧水がここで「あくがれてゆく」と詠むことは考えられないし、これによって、この一首は多くの共感を得た。現代短歌における「あくがる」人気を決定づけた一首でもあるにちがいない。

大西民子という「あくがれ」は、去つていった一人の心に向けるせつない執心を意味している。「なし」といつつ、その思いがなお

失せていないことを匂わせましょう。無意識のうちに心を捉えられている状態について「あくがれ」は何よりふさわしい一語だったといえるだろう。

三首目は思い切つて現代的な憧憬、自分たちの現実にはないゆえに心が惹かれてゆく意と受けとめられる。サンスクリット語で「ヒマ」は雪、「アーラヤ」は棲み家なのだという。現地に赴く一人として、森山良太はそこにごく素朴な反応を察したわけだが、「あくがれ」の語に委ねるところに、短歌一首として示すときの共感のなりたちを感じられる。

○「唇」

和歌において、身体語は食べ物以上にタブーだった。「髪」は例外だが、「耳」すら避けたという。その反動ともいえそうだが、与謝野晶子の『みだれ髪』には身体語が多い。足、肩、腕、口、唇、舌、背、乳、乳ぶさ、手、肌、額、瞳、胸、目、指に至るまで、ほとんどが複数回で詠まれている。中では「手」の二十二回が突出しているが、それと別に「やは手」などともいつている。しかも、おおかたが恋情をまつらせているとあって、やはり当時としては仰天する大胆さだったにちがいない。最も官能的な使われ方を見せている

のは唇だが、一方に「口」もあって、「唇」という用例はないことを付け加えておこう。『みだれ髪』ののち七年を経て『海の声』が世に出る。

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照る
いざ唇を君 若山牧水『海の声』

この一首の「いざ唇を君」は、よほど斬新にひびいたことだろう。『みだれ髪』に「唇」の用例がないことには触れた。そして『みだれ髪』の反響のなかで、多くの歌人がようやく肉体を歌に詠むことへの抵抗を削いでいったが、その時期に牧水は短歌の雑誌投稿を始め、晶子ら新詩社の歌に親しみ、上京して勉学に励むなかで大恋愛をしてのち、ほどなく『海の声』を刊行している。そうしたことを考え併せると、「唇」という歌ことばには牧水の創意をみたい気持ちにもなる。確証はなく推測だけのことだが、しかし、先蹤の有無はどうあれ、この一首によって、唇を「くち」と詠み、口づけを魅力的な場面とすることは、その後広く受け容れられていったのではなからうか。

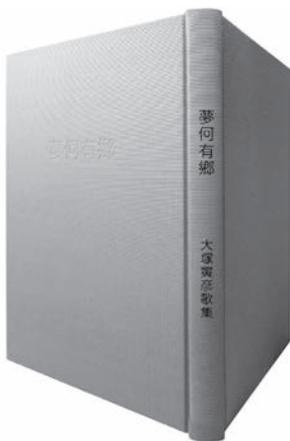
短歌特有のことばに音数への配慮がかかわる例は多く、「唇」もそのひとつであろう。古語として存在したわけでもない。ただ、口づ



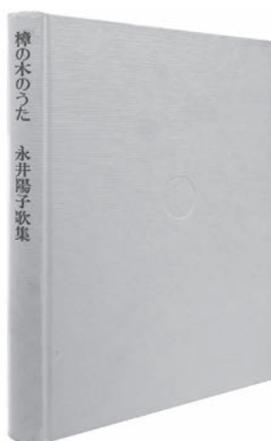
萩原朔太郎
『ソライロノハナ』

人形の泣くにあはせて唇の端のはつかに
歪む人形遣ひ 森山晴美『春信』
どしやぶりの傘の宇宙はかぎろひてほた
るのやうな唇を重ねし
永井陽子『樟の木のうた』
春風は天の吐息のあたたかさチューリッ
プの唇ほのか弛めて
大塚寅彦『夢何有郷』

けの「口」は唇とっていいわけだし、「い
ぎ唇を君」に納得する感覚はその後の歌人た
ちに着実に受け継がれていったとみられる。
わが唇と君がみ唇とひたすらに
ふれよいつまで泣いてあるべき



大塚寅彦『夢何有郷』



永井陽子『樟の木のうた』



森山晴美『春信』

牧水の一歳下の萩原朔太郎も晶子の歌に感
応して新詩社の同人となった経緯をもつ。晶
子や、同年生まれの石川啄木の影響をかなり

受けながら歌作に励んだ。のちに白秋との交
流を通して室生犀星を知り、詩作に移行する
が、大正二年には短歌への決別の意味もこめ
て手書きの歌集「ソライロノハナ」を残した
のであった。その四百首あまりのなかの一首
として右の歌がある。これも確証はないもの
の、牧水の歌に学んだ可能性はじゅうぶん考
えられるのではなからうか。
それにしても、「唇」を採用して口づけを描
いても、歌がそれほど官能的にひびかないと
ころは不思議な効用といえそうだ。牧水の
一首にせよ、若々しく晴れやかで健康的な印象
をもたらしめている。永井陽子の例歌も「ほた
るのやうな」とともに幼げな恋の可憐さを伝
えている。むしろ、大塚寅彦の例歌のように、
人体になぞらえたとき、花に付与される官能
性のほうが余韻として残る。大塚の歌は、そ
のあたりを心得てなされたものかもしれない。
現代歌人は、表現上のこまやかさを「唇」
に託すことが多いのかもしれない。森山晴美
の一首は文楽鑑賞の場面。首と右手を動かす
主遣いは顔をさらしており、無表情に見える
のに、ふと場面に即した心情が読み取れそう
な瞬間があるというのである。「口の端」を「唇
の端」とすることで、口元のいささかの動き
を見逃さなかったニュアンスになるのだらう。

○「しむ」

歌ことばといったら自立語が基本であろうけれど、珍しいところで助動詞をひとつ取り上げておきたい。使役の文語助動詞「しむ」である。

近現代の短歌の叙述が文語に支えられていることはたしかだが、そこでいう文語は、助動詞の「き」「けり」「む」「たり」「ず」など限られた助動詞に依存して文語らしく述べているにすぎないものだ。ただ、いまあげた助動詞ほどではないにしても、近現代の短歌で使われる頻度がすこぶる高いのが「しむ」なのである。それもいささか独特の言い回しとなつて歌の文体に影響していると、わたしには思えてならない。

使役の文語助動詞には「す」「さす」「しむ」の三語があり、「す」と「さす」は動詞に接続するとき、その動詞の活用の種類によって使い分けられ、それが口語助動詞の「せる」「させる」になった。

一方、「しむ」は活用する語の未然形であれば、変格活用を含め、どんな活用をする動詞にも、また形容詞にも形容動詞にも、ほかの助動詞にも接続するというように、規制の緩やかな助動詞であった。「す」「さす」が「せ

る」「させる」に移行する段階で「しむ」は抜け落ち、口語には残らなかつたのに、短歌では好んで使われるというのも興味深い現象である。

使役の意であるから「くさせる」という構文をなし、主体が何者かに何かをさせる、というのが基本的な意味なのだが、近代以降の作品中で「しむ」を採用した歌のなかには、どこかその関係が独特なものが含まれている。次の一首などは、わけても特異な例かと思うが、この手法は現代でもおりおりにみられ、おそらく茂吉のスタイルに多少とも倣う意味があるのだと思われる。

夕がれひの皿さらにのりたる木布きふ海苔のりは山やまが
はの香かをわれに食くはしむ

齋藤茂吉『ともしび』



齋藤茂吉『ともしび』

何かを食べること、その場面を積極的に歌にした茂吉は「食ふ」行為に何の気兼ねもしていないはずだが、この歌では、わざわざ食べる対象のものを主語にして述べているのである。「木布海苔は山がはの香をわれに食はしむ」という構文はかなり珍妙ともいえるのに、単純に「食ふ」と取めない苦心に読者として感応してしまうのか、可笑しみすら覚え、やがてそれが共感に至り着くものらしい。

茂吉には「草づたふ朝の螢よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ」(『あらたま』)というよく知られた一首もある。命尽きようという朝の螢に託しつつ、自分の命についてひたすらな願いを述べた歌で、たえず死を畏れていた茂吉にとつて、死は何か大きな抗いがたいものによつてもたらされるものだったらしいことが知られる。そのことの表現として「死なしむ」はごく自然な発想だし、この歌ではそれを切実な思いで制していると読むことができるであろう。茂吉の「しむ」の用例としては、正統的かつ情の濃い一首といえようから、茂吉の採用した「しむ」すべてに「われに食はしむ」のような個性がみえるわけではないということはいえる。

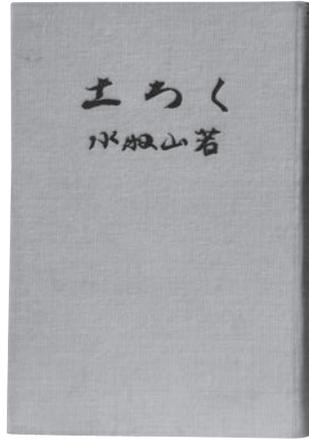
茂吉による「しむ」の用例は数も多く、明瞭なのは、語法としての「しむ」に対する茂

吉の思い入れがすこぶる強かったらしい、ということだと思ふ。では、牧水の次の歌はどうであろう。

朝酒はやめむ昼ざけせんもなしゆふがたばかり少し飲ましめ

若山牧水『くろ土』

酒量がたたつて、かなり具合も立場も悪いのだと思われる。とりあえず、朝酒はやめよう。昼酒とて、もう何にならう。ま、夕方くらいは少し飲ませとくれ。そんな感じだろうか。「しめ」は「しむ」の命令形であろう。



若山牧水『くろ土』

わが内の静かなる民起たしめよ風の重さに耐える起重機 谷岡亜紀『臨界』

本来、この歌のように「しむ」の命令形は「しめよ」のかたちをとる。青年の思想的潔



谷岡亜紀『臨界』

癖さやうかがわせる谷岡の歌は、昂然と面を上げるように発語していて、みずから奮い立たせる気概の表現になっている。使役の助動詞も、その恰好の支えといえるが、「来」の命令形「来よ」が「来」ともなるように、牧水の歌は「しめよ」の意で「しめ」と取めたと考えてみた。ただ、命令形とはいっても、どこか哀願するかのようで、そこに大酒飲みちきの稚気がまつわって、ほほえましいということになるのだと思う。その意味では、よく心得られた結びといえよう。

昨秋の「沼津牧水祭・短歌大会」でお話しした「歌ことばの水脈」に沿って、牧水の歌の魅力をお話した。観点から述べてみた。とりあげたのは四語にすぎないが、歌ことばに着目して歌の姿を時代のなかに追うというのは、なかなかおもしろいものである。そんな趣旨を受けとめていただけたら幸いです。

「筆者プロフィール」 こんの すみ



昭和二十七年、東京生れ。横浜市立大学在学中に短歌の魅力に目を開かれ、新聞歌壇への投稿を始める。昭和五十四年「年

後の章」五十首で第二十五回角川短歌賞。平成四年、夫の三枝昂之たちと「りとむ」創刊。現在、編集人。平成二十八年から宮中歌会始選者。平成元年『世紀末の桃』で第十三回現代短歌女流賞、同十七年『龍笛』で第一回葛原妙子賞、同二十二年『かへり水』で第三十七回日本歌人クラブ賞をそれぞれ受賞。そのほかの歌集に『花絆』『星刈り』『若夏記』『鳥彦』『め・じ・か』『雪占』『さくらのゆゑ』。歌書に『わがふところ』にさくら来てちる 山川登美子と「明星」作つてみよ うらくらく短歌『歌のドルフィン』『歌がたみ』『短歌のための文語文法入門』などがある。平成二十八年十月に開催した第六十三回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師

「歌ことば」をめぐり解析の『歌ことば100』が、平成二十九年一月二十日に本阿弥書店から発刊された。



「編集部から」

今野寿美先生が沼津牧水祭・短歌大会での講演「歌ことばの水脈」で取り上げられた「歌ことば」のうち、玉稿で紹介されなかった「歌ことば」は以下のとおりである。なお、最新刊『歌ことば100』に、100の「歌ことば」が詳細に記されており、

一、古語に由来する歌ことば

「汝」／「地震」／「羞し」／「しむ」／「あ

くがる」／「聞こゆ」のうち、

○「汝」「汝」「汝れ」

敬意を伴わない二人称
さまざまの七十年すこし今は見る最もうつ

くしき汝を楳に 土屋文明『青南後集』
サキサキとセロリ噛みいてあどけなき汝を

愛する理由はいらず 佐佐木幸綱『男魂歌』

○「羞し」

「瘦す」を形容詞化した語。身の瘦せ細る思い

をするのが原義 ↓ 恥ずかしい

戦ゆ生きて帰れりあな羞し言葉少なにわれ

は居りつつ 宮格二『山西省』
大香炉の煙を受けてそれぞれ病めるとこ

ろに当つる恥しき 北沢郁子『道』

○「聞こゆ」「見ゆ」

新たな現代語に言い換えられるようになって

も歌人は元の古語を好んで使う、自発の「ゆ」

を添えた語で、聞こえる、見えるの意を示す

ありありと見ゆる聞ゆる罪の影わが胸くる

しあはれいかにせむ 佐佐木信綱『思草』
「男にもいはせてください」といふ声が少し

可笑しくこのころきこゆ 河野愛子『夜は流れる』

二、古語に由来しながら新たな意味を帯びて使

われている歌ことば

○「家族」

「うから」親族・一族の意から家族の意へ。

うからは共になげけど隣室の兄のなきが

らを吾つひに見ず 斎藤茂吉『石泉』

みなづきの氷小豆のほのあかき家族集へば

影絵のごとく 辺見じゅん『秘色』

○「生活」

古語に由来しながら新たな意味を帯びて使わ

れている歌ことば、「たつき」(手がかり・方便)

↓「たつき」(生活の手段) ↓「たつき」(生活)へ。

怒りなき勤めはあらし歎きなき生活もあら

じしづかなる宵 佐佐木治綱『続秋を聴く』

空の火に追われしのも火を焚きぬ生活は

喜怒に関わりなき 三枝昂之『農鳥』

三、漢語を和語に移し替えた歌ことば

○「写真」

「うつしゑ」(風景・花鳥などを写し取った絵)

+「写真」(肖像画・フォトグラフ)

半世紀経しとよ安保反対のデモのうつしゑ

に鉢巻の夫 村山美恵子『浚井』

小野洋子の一族集へる写真にジョン取まれ

り貴種のごとくに 高島裕『旧制度』

四、読みの工夫

「飲食」／「唇」／「初夏」／「過去」のうち、

○「飲食」

「飲食」に替えて呉音による読み「おんじき」

を採用。

日の央わが額髪灰のせて飲食のことに虜は

れやまぬ 斎藤史『やまぐに』

わたくしの飲食ゆゑにたまきはる内にし

びて明日さへ居らぬ 佐藤佐太郎『しろたへ』

○「初夏」

江戸期の俳人が漢語の初夏を「はつなつ」と

言い換えた。むしろ歌人に歓迎された語。

西の京大阪かけてはしきやし吉井勇のあそ

ぶ初夏 与謝野晶子『春泥集』

軍用ヘリコプターがはつなつの入道雲に

格納される 木下龍也『つむじ風、ここにあります』

○「過去」

佐藤佐太郎の創始?

とどまらぬ時としおもひ過去は音なき谷に

似つつ悲しむ 佐藤佐太郎『歩道』

二十四年のわがすぎゆきをかへりみむ忘れ

がたきこと何々ぞ 安田章生『樹木』

五、どこから出てきた?歌ことば

○「草生」

煩惱の赤き花よりやはらかに煙る草生へ鳩

飛びうつる 北原白秋『桐の花』

その子らを草生の奥に置きしまま父なる闇

を戻り来しなり 岡井隆『臍器』

○「濃ゆし」

さくら森さくららの道の下照りに隈どり濃ゆ

くわが佇ちつくす 河野裕子『桜森』

浄瑠璃の人形体は人体より軽ろく小さく毗

濃ゆし 北野ルル『ちりぬるを』

第二十七回

中学生短歌コンクール

今回も市内十七校の協力を得て中学生短歌コンクールが実施された。応募作品数は、

千九百五十二首。短歌という文学に触れる機会として各中学校で取り組んでくださることに感謝しながら選歌をし、特選十首、入選四十二首を選んだ。特選歌はいつものように秋の沼津牧水祭・碑前祭で表彰させていただいた。

以下、特選の作品について少し触れながら中学生らしい新鮮な眼と表現を楽しみたい。

収穫を祖父に任されるうれしさよじゃがいもほりは宝探しだ 望月一求(暁秀中) じゃが芋掘りの手伝いだ、任されると受け止める姿勢が楽しい。

色あせたシャツに思い出つめこんでこれ最後の夏服を着る 渡邊琳太郎(市立高中等部)

中学三年の夏、「これで最後の夏服」に三年間の思い出が凝縮する。良い事も悪い思い出も昇華して、色褪せたシャツに収斂するのだ。

大変は大きく変わると書いて読む今年は大変も高校受験 小林慈英(第一中)

受験は一つの人生の転換期。大変を分解して大きく変わると文字遊びから引き出す受験、このゆとりが良い。

澄み渡る朝の空気を吸い込むと私の素敵な今日が始まる 神津初音(金岡中)

朝の新鮮さをストレートに詠いあげる素直さと「素敵な」と言い切る楽しさ。

人混みをかきわけ歩く君の瞳の中できらめく真つ赤な花火 後藤美優(第二中)

夏祭の花火の歌は多い題材の一つ。綺麗、楽しいと詠う歌が多い中で、この歌は連れ立つ友の瞳に映る花火を捉える。切り取りの妙。

ビー玉をからんころんと鳴らし飲み出し てほしいとねだる幼子 山口実咲(大岡中)

ラムネ瓶の中のビー玉を欲しがらる幼児と、そんな幼さを楽しむ少し大人になった作者。 向日葵にかくれる子供とかくれんぼ風にふかれる麦わら帽子 並木明莉(大平中)

夏の風物詩向日葵を取り込んで、かくれんぼの子の麦わら帽子を焦点化する技法に脱帽。 一面に水色ぬった画用紙に風りんの音を つけてみたいな 谷川小雪(今沢中)

具体性には乏しいが、現代短歌に一步踏み込んだ詩情が表出されていて見逃せない歌だ。 歌声と夜空に消えゆく火の粉たち火の粉 たどれば北斗七星 楫 愛花(第四中)

高原教室のキャンプファイア。「火の粉たどれば」から北斗七星へと一気に高めて行く中に楽しさを享受する意識が込められている。

染まってく私の心ブルー色弟達よけんかはやめて 中島七海(第五中)

弟たちの喧嘩に心を痛める姉。ブルー色にその心を託す。弟への思いとこの巧みさがよい。

入選四十二首も特選と遜色のない作品が並んだ。時事詠の中から二首だけ紹介する。

逃げるなよ公金横領もみ消すな自分の口でしっかり話せ 藤原大和(市立高中等部)

無関心あなたの一票無駄にした文句を言える立場ではなし 石川桃子(市立高中等部)

選は、沼津牧水会理事の青木朝子、曾根耕一、永久保英敏と須永が担当した。(須永秀生)



第 63 回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式 平成 28 年 10 月 16 日(日)

第二十一回若山牧水賞に 吉川宏志氏の歌集『鳥の見しもの』



(宮崎日日新聞社 提供)

第二十一回若山牧水賞に吉川宏志氏の歌集

『鳥の見しもの』（本阿弥書店）が選ばれた。

選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、馬場あき子、伊藤一彦の四氏である。

授賞式は、平成二十九年二月七日（火）宮崎観光ホテルで行われ、佐佐木幸綱氏の「短歌の主題」と題する記念講演があった。翌八日（水）、吉川宏志氏による「若山牧水―言葉と身体―」の受賞記念講演会が日向市中央公民館で催された。

吉川宏志氏は昭和四十四年宮崎県日向市東郷町生れ。京都大学文学部卒業。六十二年に短歌結社「塔短歌会」に入会、平成二十七年から主宰。京都新聞歌壇選者。京都市在住。

存在は薄くなり、無化されるような現代を生きているが、吉川さんは無力を感じる中から何かを言っている。伊藤一彦氏は「内面でものを見てそれを主観で歌う、内面志向の歌人」。

歌集『鳥の見しもの』から、自選十五首のうち十首を紹介する。

磔刑の縦長の絵を覆いたるガラスに顔は
しろく映りぬ

胡坐から体育座りに変えながら「廃炉」

の文字を持ちつづけおり

白菊の咲く路地をゆく傘ふたつ高低変えて
すれちがいたり

ときどきは白き狐の貌をするむすめが千
円くださいと言う

鳥の見しものは見えねばただ青き海のひ
かりを胸に入れたり

ビニールに包まれ白き櫛があり使わずに
去る朝のホテルを

立ちながら殺されてゆく樹がありぬ或る
条文のようにしずかに

耳、鼻に綿詰められて戦死者は帰ってくる
べしアメリカの綿花

はじめから沖繩は沖繩のものなるを順したがわ
せ従したがわせ来ぬ

小児甲状腺癌百人を超ゆという数のみを
言えりその百の咽喉

『風景と実感』『対峙と対話』がある。

吉川氏は受賞に際し、「とても憧れていた賞です。宮崎県から発信し、短歌をあまり知らない人にも、言葉、文学、自然について考えてもらうきっかけをつくっていく賞だと思います。だから、責任も感じます。」と話している。

選考委員の各氏は、以下のように評している。佐佐木幸綱氏は「表現の詰めやめりはりがしっかりとし、細かいディテールにまで行き届かせる歌人」。高野公彦氏は「行動者という面が出ている歌集だが、歌を作るタイプとしては思索者だろう」。馬場あき子氏は「私たちは、世界的な圧力に押しつぶされ、個の